

エコチル調査地域に還元

身の回りの化学物質などが子どもの健康に与える影響を調べる「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」について、教職員が理解を深めるイベント「サイエンスカフェ@山梨」（環境省主催）が27日、身延・中富総合会館で開かれた。参加者はこれまでの研究成果を学び、データの活用方法などについて意見を交わした。〈戸松優〉

エコチル調査は、全国で約10万組の親子が参加。県内では約4600組の親子が協力して2010年度に始まった。この日のイベントは、研究成果を地域に還元し、子育てに関わる関係者が化学物質のリスクなどについて対話する場を作ろうと、環境省が県内では初めて開いた。県内で研究拠点となっている山梨大甲信ユニットセンターの研究者や小中高校の養護教諭ら約20人が参加。同大学院の篠原亮次特任教授と三宅邦夫准教授が研究成果を報告した。

三宅准教授は、妊娠中の母親の栄養摂取状態が3歳時のコミュニケーション力や細かい動作を伴う運動能力の発達に関連があるとの研究を報告。「参加者の協力とデータの蓄積を基に、今後も胎児期の環境要因の長期的な影響を明らかにしていきたい」などと話した。

意見交換会もあり、参加者からは「新型コロナウイルス禍の子どもの生活習慣への影響に関心がある」「データが若者への栄養指導に役立つのではないか」といった声が上がった。



エコチル調査について理解を深める参加者

—身延・中富総合会館

身延でイベント 研究者 教職員と意見交換